

立命電友会

「思い出すままに」

日本電気計器検定所尼崎試験所
所長 北川 英雄 (昭和三十五年卒)



この度、立命館電友会の会報への執筆を依頼されましたが、作文が到って苦手な私には何を書いた方がいいのか困ってしまいました。卒業してから、勤めが東京であったため、大学へはあまり行っていないませんでした。

十年くらい前、計器用変成器のJIS改正の委員会で小山先生(当時は井上電機)と一緒になっ

た時、昭和二十七年卒の先輩だと紹介されました。その後何かとお付き合い願ったのですが、インパルス関係で辻村先生にお世話になり、大学をお尋ねしました。私たちが在学した頃は衣笠キャンパスは理工学部だけで、木造の校舎に一〜三号館だけが鉄筋でした。十年くらい前にいったときは、建物一杯で、電気科が何処にあるのか分かりませんでした。実験室も空調され、隔世の感がしました。平成四年に理工学部がびわこ・くさつキャンパスの方に引越すため、お別れ会がある事を聞いて参加しましたが、三十五年の同期生は誰もいませんでした。それでも、浦山先生は私を覚えていてくださったのは感激でした。電友会や学園に関連するかどうか

分かりませんが、私の最近関係していることを述べたいとおもいます。

ご参考になれば幸いです。

国際化、グローバル化といわれており、日本の規格も国際規格に整合することを要求されています。

この五・六年品質管理、トレーサビリティというのが話題になってきました。品質管理は敗戦後、国産品は安かろう、悪かろうを克服するために、米軍の品質管理システムを勉強し、日本的品質管理システムを進め、世界に冠たる品質の製品を作るようになった。欧米では、品質管理は不良品を排除しようというものであるが、日本の品質管理は不良品を作らないためのシステムで、その考え方が違う。しかし、ヨーロッパで品質管理システムの規格(ISO 9000シリーズ)を作り、それを日本にも押しつけてきました。一九九〇年代に入って、多くの企業がISO 9000の重要性に気付き、ISO 9000取得に努め、また財界も働日本品質システム審査登録協会を創り外国との相互承認に向って交渉中です。

要はなく、親会社が、標準となる抵抗やコンデンサを部品メーカーに渡し、これと同じ抵抗、同じ容量値のコンデンサを造らせれば良いわけです。しかし、グループ企業間ではそれでよいが、海外から日本企業の閉鎖性を指摘され、このようなシステムが避難され、誰でも参入できる仕様書が要求されるようになりました。それは国家標準へのトレーサビリティの要求です。ISO 9000でトレーサビリティの証明が要求され、校正所(calibration lab. ISO/IECガイド二五でのtesting lab. 試験所と区別した。)の認定が必要になってきました。

平成四年に改正された計量法に校正所の認定制度が盛り込まれました。

認定基準はISO/IECガイド二五に準じて省令が作られました。詳細な基準作りを行わないままで認定作業が行われ、電気関係は基準の細則作りを行っています。

計測はあらゆる科学、技術の基本であります。計測することによって理論を実証し、量を可能にしているからです。しかし品質管理、計量管理の部門はどの工場にもありますが、余り脚光を浴びる所でなく、地味な仕事でした。そのため、世代の交代が進んでおら

ず、定年前後の委員たちが五十代の委員をリードするような状態です。

技術の空洞化が叫ばれています。が、若い人達がこのような地味な仕事に如何にして興味を持たせるかを模索して行かなければならないと思います。

私が、大学を卒業して、電気試験所(現在の電子技術総合研究所)に入所した頃、配属された上司に「何を研究するつもりで来たのか。」聴かれ、「まだ、何も考えておりません。」とこたえた。しばらくして、「この本でも読んで。」と出されたのが、ドイツ語のシュミット回路の解説書であった。(当時はまだ、トランジスタが出はじめた頃です。」「大学でドイツ語は習いはしたが、とても読める状態ではない。」という、翌日に大学ノート一冊、その本を訳してきて、「これなら読めるだろう。」といわれた。また、ある人に、数式を作り、「これが解ければ、このようなことが出来ると思う。」と相談すると、見ただけで、「これは解けない。その証明は、……。」従って、こういう条件をつければ、こう。こういう条件下では、こう。」と、たちどころに解いてしまう。博学な人ばかりで大変なところに来てしまったと

思いました。

今企業は、すぐに戦力化できる人を求めているというが、大学で、先端技術を学んでも、最先端は、すぐに次の先端技術にとって変わるものであり、多様化したニーズをすべて満たすことは不可能であると考えます。結局、必要に応じて対応できる基礎知識を十分使える状態にしておくことが必要なのではないでしょうか。三十五年経った今、思い直すと二十代は十年経っても古くならないアイデアを出せるが、知識が伴わないため、実用化できない。私も昭和三十六年に出した特許を二十年経った頃に必要が出てきて、ものを作り出したことがあります。三十代が研究者としてはいちばん充実しているのではないだろうか。四十代となると、すぐに役立つアイデアは出るが、画期的なものはない。五十過ぎると、自分で半田ごてを持つ機会もなく、また、こつこつ実験をするのが面倒になっているようです。

取りとめのない事をいろいろ述べましたが、こちらに勤務している間に同窓会を開きたいと思っています。

立命館学園と電友会の今後の発展を祈り筆を置きます。

新任のご挨拶

光 工 学 科

池 田 光 男

この四月に新しく電気電子系に加わりました池田光男といえます。どうぞよろしく願います。私は京都大学建築学教室から来ました。そこに五年半居りましたが、その前は東京工業大学の物理情報工学専攻に二十年ほど居りました。そしてその前は、ミノルタカメラ、さらにその前はアメリカのロッチエスター大学の心理学科、同じく光学研究所です。このようにいろいろのところを経てこのびわこ・くさつキャンパスに到着しました。しかし勉強と研究は一貫して人間の目の構造、性質、そしてその応用です。人間はいわゆる五感を通して外の情報を取り入れています。目、耳、鼻、口、手を通してです。そのうち、目が一番多くの情報を取り扱っています。それは、目は空間的に広がる景色を一瞬のうちに「見る」能力を持っているからです。そして、もう一つ、その情報は光によって運ばれるものだからです。光は遠くのもの情報も送ってくれます。触覚ですと手の届く範囲の情報しか入力できません。聴覚だと音源の方向はほぼ分

かって音を出している物の形までは分かりません。視覚は遠くの物も、形も、色も理解します。光と視覚系が相俟って、私たちは日常の生活をスムーズにおくること出来るのです。

それほど役に立つ視覚系ですからその構造も機能も並大抵のものではありません。眼球があつて、そこから神経系が出ていて、そして入力信号を受けて処理し、理解する大脳があります。そこまでが人間の視覚系です。この視覚系について研究しているのが私ですが、もう一人同じような研究をしている方が篠田専任講師です。二人で協力して学生を指導します。感性、快適空間、ハイビジョン、マシーンビジョン、バーチャルリアリティ、高齢者、等々、最近の多くの話題は目の研究に関係します。これからの社会で指導者となれるような学生を育てていきたいと思っています。よろしく応援して下さい。よろしくお願いします。

「すつきり」、「静か」、だけでは物足りないこともあるかと思えます。歴史とともにこのキャンパスにも、人間味がしみついてくるといいと思います。苦情を一つ言いますと、公共の場での喫煙が多いということ。先日、トイレに行ったら、その近くの喫煙場所の煙が沢山入り込んできて、それで喘息が発作しました。立命館は国際的に活躍できる学生の育成を一つのモットーにしていると思いますが、これでは国際化と言うわけにはいきません。そういう環境もおいおい良くしていきたいでしょう。

電気電子工学科

今 井 茂

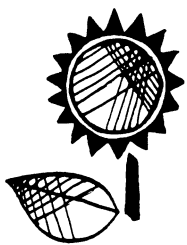
このたび、電気電子工学科の助教として、このびわこ・くさつキャンパスに着任いたしました。どうかよろしく願います。私が立命館大学の名前を心にと

六〇年に札幌市に生れて以後、釧路、金沢、富山、仙台、東京と居住地を変え、草津市は七番目の居住地ということになります。美しい景観を持つ琵琶湖に隣接し、長い伝統と歴史をもつ京都、近江の地に住むことができることも喜んでゐる次第です。

私は以前、「電子の動きが目に見えるようになれ」と教えられました。それは、直接的に定性的なものごとの本質を理解することであり、電子が右に行くのか左に行くのか、右が多いのか左が多いのかを判断することができるといふ意味であろうと私なりに理解しています（もちろん、後で定量的に計算できなければ困りますが）。いまや教えられる立場から教える立場に回ったわけですが、「電子の動きが見える」という教え方ができれば、また、自分自身も電子が見えるように研究を進められれば幸せであると存じます。

私は、前の職場の東京工業大学において、電子物理工学科の松村正清先生のもとで、IV族半導体の原子層エピタキシー、原子層エッチングという研究に携わってきました。半導体デバイスの寸法は、限界が来る来ると言われながらも減少し続け、いまや、横方向でサブミクロン以下、縦方向では、一

〇ナノメートルのオーダーに入っています。この一〇ナノメートルというサイズは、シリコン原子の個数にして七〇個程度であり、原子のオーダーで製造プロセスを制御する時代になっています。原子層エピタキシーは、二段階のステップを繰り返すことにより、一原子層ずつ材料を堆積する技術です。原理的に堆積速度は、サイクル数のみに依存して、温度や原料ガスなどのパラメータに依存しないため、大面積にわたり均一かつ正確なプロセスが可能となると期待されます。また、この手法は、堆積のみならず、表面加工（エッチング）にも応用でき、また、半導体だけではなく絶縁体や金属にも適用可能と考えられます。今年度は、金属（アルミニウム）及び絶縁体（酸化シリコン）の原子層堆積とその特性評価を行いたいと思っています。将来は、これらの技術を利用して新しいデバイスを作製していきたいと考えているところで



光 工 学 科
岩 崎 博

一九九六年四月に新たに設置された光工学科の専任教員として物理学科から移籍して参りました。光工学科に入学した第一期生とともに、学科の歴史の第一ページに当る時期に働く機会を得たことを光栄に思っております。

私は仙台市にある東北大学で研究者としての第一歩を踏み出しました。本多光太郎先生が創立した金属材料研究所に所属し、X線回折法による合金の結晶構造の研究をテーマとして日夜励みました。

目には見えない原子の世界がX線という短波長の光の回折現象を通して明らかにすることの面白さに魅せられて、先輩とともにこの分野の学理を懸命に勉強しました。金属材料研究所は国立大学の付置研としては二番目に大きな研究所で、同じような分野の研究者が多数ひしめいていて競争の激しいところでした。研究成果を挙げ、目立つことを急ぐあまり、研究の基礎の理解や結果の検討が不十分なまま、発表する人がずいぶんいました。しかし私の属したグループは、いたずらに空理空論に走らず、足を地につけて着実に歩め、という方針を守り、確実な結果だけを

論文とすることを心掛けました。このような方針が長い眼で見れば勝ちにつながることは、その後の年月を振り返ってみるまでもなく明らかでした。人情が素朴で自然に恵まれた仙台の街が気に入って、結局そこに二十八年間を過してしまいました。

ところが一九八〇年代の前半頃、放射光が出現し、それがX線よりもはるかに優れた性質を持つていることを知りました。ただちに筑波市にある高エネルギー物理学研究所に出かけ、電子加速器から出る光を用いて、それまでは不可能であったような実験を実現し、研究の行く手にあった壁を乗り越える喜びを味わいました。筑波市に何回も来るうちに、運命は私を東北大学からこの文部省直轄研究所に移らせることになりました。高エネルギー研は関東平野の一面に広大な敷地を有し、放射光加速器の他に巨大な加速器群を擁する近代的な研究所です。ここでは世界を相手とする一層はげしい競争が繰り広げられており、徹底した合理主義と自由な批判精神が横溢しています。国内・国外から毎日多数の研究者が訪問し、国際色が豊かなところudur。ここではタフな精神力と旺盛な生活力がないと生きて行けず、私は八年間おおいに

鍛えられました。

そして二年前、美しい湖畔のBKキャンパスに参りました。ここで感じたことは雰囲気の良いことです。そして学生の教育が大事だということの再認識です。仙台と筑波で経験し、蓄積した多くのものを学生の指導に生かすとともに、今までの研究を広い視野から見つめ直して研究論文を次々と書くことにしています。粗野な面が残る仙台、茨城と異なつて洗練された風俗を持つ近江地方は私にとつて興味ある土地です。ここに暮すことになったのも運命の巡り合わせですが、時間の許すかぎり生活を楽しみむつもりです。「人生いたるところ青山あり」というのが近頃の私の心境であります。

電気電子工学科

北 澤 敏 秀

大学客員研究員として合計三年間、研究、教育に専念する機会を与えられました。

立命館大学BKCは非常に個性的な建物がセントラルサーカスを中心に設置された日本の大学としては珍しいタイプのキャンパスですが、私にとつては最も充実した研究、教育生活を送ったイリノイ大学を思い出させてくれます。イリノイ大学のホームタウンのアーバナ市も草津市と同じ人口が十万人の地方都市です。また、市民が大学を愛し、誇りに思っている点も共通しています。大学の新設あるいは移転に伴い静かな環境のもとに生活してきた地域住民と新たに移り住む活発な学生との間での騒音、違法駐車等のトラブルはしばしば耳にするところですが、BKCの場合には地域懇談会等での評判も上々と聞いております。また、BKCにおいては、キャンパスのインテリジェント化を進める一方で、スタジアムの地下の木瓜原遺跡を大切に現状保存する努力を払っていますが、イリノイ大学においても、キャンパスに在る全米最古の実験農場のちっぼけなトウモロコシ畑に十分な日照を与えるために、隣接する全米第三位の蔵書数と世界に先駆けて構築したオンライン検索システムを有する

四階建ての図書館の下二階部分を地下とする等、最先端の設備と歴史的に貴重な遺産との調和をはかる点も共通しています。また、強力なフットボールチームを持つていることも共通しています。赴任後、日が浅いにも関わらず愛着を感じるこのキャンパスで、教育、研究生活を開始することに、喜びを感じております。

専門は応用電磁波工学で、各種電磁波回路の電磁界解析、シミュレーションを行っております。最近、NTT無線システム研究所の依託を受けて、移動体通信用マイクロ波、ミリ波回路ならびに小型アンテナの解析・設計法に関する研究を行っております。また、ATR光電波通信研究所の依託を受け、電波と光との相互作用を利用した光変調器の計算機支援設計プログラムの開発も行っております。今後も、大学の主体性を失わないよう留意しつつ、他の研究機関との積極的な連携、協力の基に、研究を進めて参りたいと考えております。幸い、本学においては、産官学の交流を積極的に推し進めるためのリエゾンオフィスが設置されており、強力な後ろ盾を得た思ひです。また、研究を通じて得られたものを卒業研究、大学院学生の指導等を中心とした教育面に

において還元する努力を続ける所存でございます。ご指導のほどよろしくお願申しあげます。

光 工 学 科 高 倉 秀 行

このたび、平成二年開学で満六年の富山県立大学から、開学百年を迎えようという本学に、縁あって着任しました光工学科の高倉秀行であります。

私の研究テーマの中心は、結晶成長でこれにつながりそうなテーマにいろいろ浮気をしながら今日に至っています。始めて取り組んだ結晶成長法は気相成長法の一つである不均等化法によるガリウム砒素隣であり、V族塩化物の分解によりガリウムを輸送し、ゲルマニウム基板上に成長させるという技術でありました。今日では有機金属原料を用いたMOCVD法が広く利用されていますが、私がこの研究に取り組んだ七十年代前半ではまだ見通せずに、V族元素の不純と塩素によるエッチングとの格闘でありました。V族元素を増やすために、III族原料として金属単体ではなく多結晶の化合物半導体を用いることを提案し、良い結果が得られることを報告したのが私の最初の論文です。ゲルマニウム

上への化合物半導体の成長は、一種のヘテロエピタキシであり、近年詳細な研究がなされたシリコン基板上成長での問題点であるアンチフェイズドメインの発生についても、それを示唆するデータを報告しました。この構造の応用デバイスとして、安価高効率太陽電池が近年注目を浴びるようになっていきます。そのようなテーマに二十五年前に出会えたことは大変幸せに思っております。修士課程終了の頃が、第一次オイルショックであったことから、博士課程で太陽電池の研究をやって見ろという恩師浜川先生の勧めに二つ返事で乗ってしまったのが、大学で研究を続ける機会を得ることが出来たきっかけであったと感じています。現在、精力的に取り組んでいるテーマは三つあります。一つは、太陽光発電で、高効率太陽電池素子の開発・特性評価から光発電システムの最適配置・運転の研究まで間口を広くとってやっています。最近では、薄膜多結晶半導体を用いた太陽電池の開発が急がれており、材料物性の評価、タンデム化による高効率化手法の開発を行っております。二番目は無重力を利用した新機能材料の開発であります。これまで、材料分野で無重力利用といえば固液間の成長における

無重力の作用を利用したものが多かったのですが、私のテーマは気相中でガスの振る舞いでの重力の影響に注目し、無重力を利用することの利点を見出すことであります。現在落下塔を利用する実験を通して、熱対流の影響を調べる研究を行っています。三番目は、夢の結晶成長ともいえるグラフォエピタキシ技術の開発です。これは、ガラスなど安価な基板上に薄膜半導体の単結晶を成長させようとすることで、実現できれば半導体材料が飛躍的に安価になり、半導体デバイスの製造に大きく貢献できると思われます。具体的にサブミクロンのサイズの規則正しいパターンシェイションを基板表面に作り、成長する結晶の方位をそろえて単結晶化しようとするもので、現在七合目というところでしょうか。

電気電子工学科
山 内 寛 紀

電友会の皆様こんにちは。今度電気電子工学科に着任した山内でございます。一九七三年に東京工業大学を卒業し、七十五年には東京大学の修士課程を修了しました。当時のテーマはいずれもマイクロ波にからむことで、学部では磁性体を使った電波吸収壁の特性解析、修士では当時の東京大学宇宙航空研究所にて、GHz帯の固体発信機の発振モード解析を行っていました。

七十五年にNTT（当時の日本電信電話公社）の武蔵野電気通信研究所に入所しましたが、その頃は、4KbのDRAMや8bのマイクロプロセッサ、さらには世界初のパソコンが開発され、集積回路とマイクログロプロセッサの研究は日の出の勢いでした。かのビルゲイツがパソコン用BASICSを開発し、後のマイクログソフト設立へと繋ぐ事になったのも確かこの年です。私は固体発信機をやっていたというだけで、集積回路研究部に配属され、約六年間バイポーラ集積回路の回路とデバイスの研究を行いました。そして世界最高速の乗算器LSIやおペアンブを開発したと言って喜んでいたもので

す。

八十年代に入って集積規模が拡大するにつれ、私はしだいに、通信および情報処理の専用プロセッサの開発に携わるようになっていきました。今でこそパソコンの能力はすばらしいもので、動画像処理まで一部可能になってきていますが、当時は、パソコンはまだまだオモチャ扱いでしたし、IBMの大型マシンでも動画像処理は遠く及びませんでした。ですから、汎用ではなく、目的に合わせたアーキテクチャがもてはやされたのです。特に私は、デジタルシグナルプロセッサと動画像処理プロセッサのアーキテクチャを研究し、また共同でいくつかのシステムも開発しました。地下埋設物探知装置、電子ビーム露光装置、テレビ電話／会議システムなどです。博士論文もこれらのアーキテクチャに関するものです。

九十年代に入ると集積回路技術は成熟し、こんどはこの成熟技術を使って何を作るか、また何ができるかが厳しく問われるようになってきました。そこでアルゴリズムなくしてアーキテクチャなしの観点から、動画像符号化やデジタルホログラフィ等の研究を行うようになりました。NTTでの最後の仕事は、DVDやデジタル



放送用のMP EG2パソコンボードの開発でした。

こちらに来てから、約二週間の

間、大学と企業の研究者に着任メ
ールを打ち続けましたが、そのと
きBKCを宣伝し(イントラネッ
トや産官学共同体制)、「東のSFC、
西のBKC」を話題にさせて
もらいました。正直言って、BKC
は初耳だという人はかなりいま
したし、立命館は大阪にあると思
っていたという人さえいました。
でも半数程度の人は良く知ってい
て、日経新聞の特集記事まで教え
てくれる人もいました。それらの
中から最も感銘を受けたマイルの
一部を以下に紹介させて戴きます。
『東のSFC、西のBKC』に
ついては、全く頑張って欲しいと
思います。これは、いい意味で、
アカデミズムへの競走原理の導入
だと思えます。これまで、日本
のアカデミズムは、実学ではなく、
名学(ネームバリューだけが形骸
化したもの)でした。日本産れの
一流大学は、血統書を与えるのが
仕事で、役に立たない人材を一流
企業へ送り出してきた訳ですが、
一流の大学も一流の企業も本当に
欲しいのは、一流の人材であって、
血統書付きの人材ではないと思ひ
ます。BKCが一流の人材を数多
く輩出し、今まで世界のどこにも

存在しなかった一流企業を産むキ
ャンパスになれると直感しまし
た。』

私は就任のときのガイダンスで、
立命館は同志社をライバルにして
いた時期から脱皮し、世界のBKC
へ歩もうとしているのだと感じ
ました。同時に、このような大学
に私ごときが来て大丈夫なんだろ
うかと心配になりました。それか
らもう胃の痛む毎日です。でも乗
りかかった船だと軽く考えること
にしました。ちなみに血液型はB
型で楽観主義者です。私なぞこれ
からどれほどの事もできるはずが
ありませんが、世界のBKCへ向
けての発展に少しでも貢献できる
よう精一杯努力させて戴きます。
最後に、私は大学からずっと東
京で暮らしてきましたが、実は生
れは福井県大野市で、高校まで福
井で過しました。そして帰省の時
はいつも米原を通過し、「ああ国
に帰って来たんだなあ」としみじ
み思ったものです。ですからこの
滋賀県のキャンパスには特別な親
しみを感じています。合わせてど
うぞ宜しくお願申し上げます。



定年退職を迎えて

辻村 寛

受験のため、衣笠山麓の松林を
縫って木造校舎に駆け込んだ四十
八年前の情景が、今でも鮮やかに
思い出される。文字通り私を教え
育て、そして生涯の仕事の場を与
えてくれた母校である。十七歳の
時まで、ほとんど馴染みの無かつ
た京都で、深い考えも無く受験し
た学校に生涯を託することになろ
うとは当時は夢にも思わなかった。
どうも私は、自らの進路を積極的
に切り開く面に欠け、与えられた
道を甘受して歩む性格のようであ
る。わりあい楽観的な面をもつて
いて「困難に直面しても努力を惜
しまなければ時期が解決する」と
言うのが信条で、このことは、四
十三年の在職期間を振り返ってみ
て、学園をめぐる種々な問題に遭
遇して得られた教訓でもある。

教員になって、よかったと感じ
る事は、常にフレッシュな若人と
接する事ができた点であり、肉體
的にはともかくも、精神的には随
分若いと思っている。友人、知人
に、「昔の学生と今の学生はどう
ですか」の質問をよく受けるが、
無限の可能性に夢を託せる、若さ
と逞しさの本質においては変らな
いと思っている。ただ、日常の生
活様式は随分かわったと痛感させ
られる。一昔前までの学生の娯楽
はマージャンであり、コンパはす
き焼きと決っていたものだが、今
の学生はあまり雀座を囲んだり集
団で遊ぶことが少なくなっている
ようだ。時代とともに学生生活も
変化するのは当然であるが、面白
いのは、卒業後数年もたつと異口
同音に「最近の新入社員とは話が
どうも合わなくて」である。「君
もうそんなにくたびれたの」と思
ってしまう。

母校出身と言うこともあって、
若い頃は教職員組合の理工職場委
員、執行委員を否応なく引き受け
させられた。このことは、当時、
理工学部だけが衣笠にあり他学部
の教職員とは接することがない中
で全学的に日常的に名前を知られ
ることになってしまい、一九六八
年、全国的に広がった学園紛争の
最中、学生部次長に引き出される
羽目になった。今でも、当時のこ
とは思い出したくない日々ではあ
るが、私の性格の一部も変える経
験であったと思っている。旧四号
館は衣笠で唯一封鎖された建物で
あったが、良識ある学生の力によ
り半日で解除された。集団心理の
恐ろしさと暴力否定の大切さを改
めて認識することができた。苅屋

教授・井上教授ら若手教員を中心
とした奮闘と、それを容認され側
面から支えられた恩師の気持ち等、
教室の一致した取り組みが収束を
早めたと思っている。

在職中に三度の研究室移転を経
験している。衣笠では木造から鉄
筋に建て替えられた最初の実験棟
が電気工学科であり、羽村先生の
ご尽力に負うところが大きい。旧
四号館は一九八八年まで二十七
年間使用されたので、最も多くの学
生と交流した場であった。特に、
紛争直後に狭いながらも卒業研究
を行う拠点として研究室を解放し
た事は、学生の自主的取り組みを
促し、日常的に教員と交流する場
を保障するものとして、大きな役
割をはたすことになったと思っ
ている。

在職中を振り返り万感こもごも、
指導いただいた先生方、共に助け
あった同僚の方々に感謝すると
ともに、何よりも立派に育ってい
てくれた皆さん方の活躍を期待す
る気持で一杯である。



三十数年間振り返って

凌 舜 堂

(昭和三十五年卒)



立命電友会事務局から会報執筆の御依頼を受けましたが、いざ書こうとすると皆様に報告できるこれというものがなかったので迷ってしまいましたが、まあ何とか書いてみましょう。

立命館に入学したのは昭和三十一年で途中一年病気でほとんど休んでいたので卒業したのは昭和三十五年でした。私は神戸生れですが日中戦争勃発後帰国し、昭和二十八年再び来日し、二年後に本学に入学しました。当時は留学制度がなく日本の学生といっしょに入試を受けたが、幸い受験科目は英数理科で日本語のハンディをそれほど受けずに入学しました。入学後、先生や同級生の暖かいご支援を頂

き授業を受け、下宿探しなど生活面でも大分お世話になりました。親しい友達も沢山できました。

三回生になって暫くすると体をこわして一年間半ば休学していました。四回生からは次の学年の授業と実験を受けました。だから三十四年と三十五年卒の両方の同窓会を出席させてもらっています。

昭和三十五年でやっと卒業できましたが、当時外国人生生の就職がまだ難しい時代でした。知り合いの華僑学生の大半も技術畑ではなく他の分野に就職しました。

その時、先輩の河本(旧姓郷原)佐和子様が大阪大学で女性第一号の新制工学博士を取られたことを新聞で読み、大いに刺激を受け同じ大阪大学大学院の入試に挑戦し、二度目でやっとパスして、次の五年間はその通信工学専攻で勉強させてもらいました。

大学での卒論は小堀先生のもとでアナログコンピュータのオペレーションという言葉が流行っていた時代なので、大学院では実際には何も判らないのに自動制御をやりたいと申し出ましたが、結局、回路網理論に入り、最初の数年間はグラフ理論、OR、トラフィック理論の関係のものを勉強しました。

大学院修了、学位取得後、助手として残り、昭和四十七年まで勤務しました。その間いままでのテーマの延長線上のものとパターン認識についても多少かじってみました。

その後古野電気㈱に入り、約半年後父が病気となり、私は家業の貿易商の代行を余儀なくされ、方向転換しました。ちょうど日中国交回復の時期に当り、年に数回、中国へ帰り、親戚や旧友とたびたび逢う機会ができ、また日本のお客様に中国のことを実地で紹介できたことで楽しかったが、利益があまり上がらず、十年間続けたが、昭和五十七年に同じ研究室の後輩が創立したソフトウェア会社日本バイナル㈱に入社し、再び技術者としての道に復帰しました。平成元年、他のネットワーク・ソフトウェア輸入販売会社になり、平成三年まで計九年の会社勤務生活を過しました。

平成三年に退職し、その後はそれほど貿易もし、技術コンサルタントも行い、外国語大学で私の母国語の方言——広東語を教えて今日に至っています。

立命大卒業(昭和三十五年)以後の三十六年を振り返ってみると、技術者と貿易商の仕事に約半半を過しました。どちらも大した

成果がありませんでした。日本バ
イナル(株)勤務中、開発したパイ
自動計測矯正システムは重厚長大
の機械にかなりの精度を上げ、い
まも働き続け、その後、他のシス
テムにも適用でき、もっと高い性
能を成し遂げたのは何よりも慰め
です。このプロジェクトにおいて
も私がしたのは原理の計算方法で、
後は口だけで、実際のソフト作成
や現場試運転は若い人たちの力に
よるものでした。

技術はますます早いスピードで
進歩し、最新の技術もあつという
間に時代おくれになります。解決
すべき問題を誠実、的確に判断し、
その時の利用可能な技術を迅速に
修得、駆使してその問題を解いて
いきたいのは技術者として誰しも
思うが、それを裏付けるのにはや
はりしっかりと基礎知識の修得
と強靱の体力が重要だとつねづね
思い、私はどちらも持つていませ
んが、若い後輩たちにぜひ持つて
ほしいと一言伝えたく思います。
卒業後母校が大きく変わり、新
聞雑誌などで母校の発展ぶりの報
道に接するたび、本当に喜びに堪
えません。

母校、諸先生、諸先輩、同窓の
学友たち、諸後輩のますますのご
健勝とご発展を祈ってこのつたな
い文章を終らせて頂きます。

電気電子学系だより

電気電子学系系長

岡田 正勝

平成七年度電気電子工学科 卒業生進学就職状況

平成八年三月に卒業した学生の
進学就職状況は別表の通りとな
りました。平成七年度の求人数は、
昨年同様に全国的な不況の影響で
厳しい状況でありました。必ずし
も希望の企業に採用されなかった
卒業生もありました。社会や業界
の情勢を的確に把握しつつ、個々
に適した企業を選択するように就
職指導致しました。その結果、就
職者一八二名の就職先は一五一社
になりました。修士課程への進学
者は六七名そして博士後期課程へ
の進学者は一名でありました。本
年度も数多くの先輩卒業生の方々
から就職の御依頼を受けましたが、
十分御期待に沿えませんでした。
心から御詫びとともにお礼申し上
げます。今年度もよろしくお願
い致します。



平成七年度電気電子工学科卒業進学就職状況

項 目	学 部	修 士	就 職 先
卒 業 者 数	203	50	
進 学 者 数	67	1	内2名他大学大学院
家 業 な ど	2	1	
就 職 者 数	134	48	
会 社 ・ 官 公 庁	電力・ガス	2	1 東京電力、九州電力、関西電力
	自動車・鉄道	5	JR 西日本テクノス、JR 九州、スズキ、トヨタ自動車
	電 気 関 連	86	42 アムズ、エービービー、中央電気工業、サンクテクノス、中電工、三菱電機コントロール、島根電工、NTT、日本電産、四国計測工業、ソニー、住友電工ハイテック、アイコム、三宝電機、ディジタル、三菱電機、本田技研工業、ミネベア、東京エレクトロン、日立冷熱、竹菱電機、モリ電子工業、ダイヘン、NECホームエレクトロニクス、きんでん、大西電子、三菱ビルテクノ、住友電設、関西三菱電プラントサービス、キーエンス、ダイダ、三菱電機マイコン、メイテック、コーセル、トヨタマックス、日本システムエンジニア、東芝マイクロエレクトロニクス、菱電システム、西部電気工業、富士通電装、栗原工業、金沢村田製作所、サツマ電機、東海理化電機、FKK、鶴亀温水器工業、セイコー電子工業、日本IBM、サンウエーブ工業、日本光電工業、上山電気、象印マホービン、アイエム電子、湯山製作所、サカエ技研、光洋精工、三信電気、岸本産業、日本オーチスエレベータ、住友電装、松定プレジジョン、オムロンフィールドエンジニアリング、井上電機製作所、関西熱化学、ニチコン、ケンウッド、日本電気計器、パルテック、津田電線、ハマダ印刷機械、京セラ、福伸電機、村田製作所、メルコ・パワーシステム、ハリソン電機、日本電池、鶴見製作所、日立製作所、東芝、日本ノベラシステムズ、三洋電機、東洋通信機、松下電工、住友金属制御エンジニアリング、愛知時計電機、和泉電気、サニー技研、大日本印刷、日本電送クリエイティブ、SNKオムロン、ソニー、山武テクノシステム、日本電気、日本電装、大阪メディアポート、ブラザー工業、シャープ、アルファシステムズ、ヤマハ、ローム、リコー、西濃情報システム
	機械・鉄工関連	8	1 ダイフク、東京衡機、モリサワ、ダイハツディーゼル、石川島播磨重工、タキゲン製造、栗田エンジニアリング
	通 信	8	アステル九州、ツーカーセルラー東海、ツーカーホン関西、関西NEC通信、国際ディジタル通信、関西ディジタルホン、関西セルラー電話、関西テレメッセージ
	建 設	3	2 セキスイシステムセンター、永大産業、日本国土開発、日建設計、昭和設計
	ソフトウェア	4	長野日本ソフトウェア、東海ソフト、ほくさんソフトテック、オムロンソフト
	公 務 員	1	1 京都市、運輸省航空局
	そ の 他	17	1 ゼネガ薬品、京都第一科学、丸文、フーマン、イデヤ、ユーハイム、第一商会、アサヒビール、名古屋会計、任天堂、ナムコ、住友精化、ワールドビジネス、大日本印刷、朝日ゴルフ用品、プロゴルファー志望、日清食品

(順不同)

教員の異動

次のような異動がありました。
(昇任)

高山 茂
平成八年四月一日、電気電子工
学科助手より、同学科助教に昇
任。

(移籍)

岩崎 博教授
平成八年四月一日、物理学科よ
り、光工学科に移籍。

岡田 正勝教授
平成八年四月一日、電気電子工
学科より、光工学科に移籍。

名西 徳之教授
平成八年四月一日、電気電子工
学科より、光工学科に移籍。

(新任)

池田 光男
平成八年四月一日、京都大学よ
り、光工学科教授に着任。

今井 茂
平成八年四月一日、東京工業大
学より、電気電子工学科助教に
着任。

北澤 敏秀
平成八年四月一日、茨城大学よ
り、電気電子工学科教授に着任。

高倉 秀行
平成八年四月一日、富山県立大
学より、光工学科教授に着任。

濱川 圭弘

平成八年四月一日、大阪大学よ
り、光工学科教授に着任。

山内 寛紀
平成八年四月一日、NIT(株)よ
り、電気電子工学科教授に着任。

平成八年度の電気電子

学系の主要な委員

学系長 岡田 正勝
副学系長 寺井 秀一
企画委員 名西 徳之
就職委員 杉本 末雄
研究委員 浮田 宏生
学生委員 小松 康廣
教務委員 高山 茂
教務委員 高倉 秀行

卒業記念祝賀会開催

平成八年三月二十一日(木)卒業式
当日午後四時より、平成七年度卒
業記念祝賀会(電気電子工学科主
催、立命電友会後援)を立命館大
学びわこ・くさつキャンパス内ユ
ニオンスクエア二階にて開催致し
ました。卒業生、修了生、教員な
らびに立命電友会副会長を迎えて、
約二五〇名程の会合となりました。
晴れて卒業・修了を迎えて学生諸
君に対して、中島一郎電友会副会
長、その他より、御祝辞をいただ
きました。

立命電友会第二回
総会の開催のご案内

日頃は何かと立命電友会に対し
ましてご指導とご協力を賜り、役
員ならびに事務局一同厚く御礼申
し上げます。本会が発足致しまし
てから早や三年半が経ち、会報も
第七号を数えるほどになりました。
本会第二回総会の開催を左記の通
りご案内致します。つきましては、
皆様方のご出席を賜りたく、万障
お繰り合わせの上、ご予定下さい
ますようお願い申し上げます。

なお初秋に、改めてご案内いた
すとともにご出欠の往復はがきを
お送り致します。今回の総会は大
学校友課主催の全国校友大会と連
動した開催を予定しております。

記

日 時 平成八年十一月二日(出
午後二時より

場 所 三条蹴上 都ホテル
コスモスホール

以上

終身会費御納入の
お願いと会報発送に
ついてのお知らせ

本会は、大学・学系・校友皆様
方の相互の交流・親睦をはかるべ
く尽力致しております。安定した
運営を維持すべく、事務局では経
費削減と会計の厳肅な運営を致し
つつ、終身会費未納入の校友に対
しましてその御納入を切にお願い
申し上げておりました。しかし会
計報告をご覧いただきました通り、
本会報発行・送付に関わる経費は
年々会計全体を圧迫しつつありま
す。本件について先に開催されま
した役員会にて御審議いただきま
した結果、今後は終身会費未納者
に対しては年二回の会報の送付を
年一回にせざるをえないとの判断
が下されました。

つきましては、終身会費未納者
の皆様方に対しては会費振込用
紙を同封致しましたので、是非と
もこの機会に御納入頂きますよう
お願いいたします。

既納者未納者の区別に関しては
十分の注意を致しておりますが、
万一、既納者宛封筒に振込用紙が
同封されておりました際には、お
詫び致します。

立命電友会事務局

事務局便り

この度お届け致します会報第七
号は、通常より二ページ多い構成
となりました。本報発行にあたり
ご寄稿いただきました皆様方には、
心よりお礼申し上げます。本年度
より光工学科が開設され、電気電
子学系においては学内外より多数
の先生をお迎えすることになり、
数多くの御挨拶を掲載させていた
だきました。また、会員の連絡先
等のお知らせも会報発行毎に随時
掲載致すようにしました。

同窓会の開催など本会に関わり
のありますこと、随時御寄稿賜わ
りますようお願いいたします。ま
た御連絡先等の変更がありました
ら、事務局までご一報いただけま
すようお願い致します。

〒五二五―七七

滋賀県草津市野路町一九一六

立命館大学理工学部電気電子工学科内

立命電友会

電話 〇七七五―六一―二六六二

FAX 〇七七五―六一―二六六三

(題字は久保之俊氏)

